2024 年度前期 授業アンケートに対する文学研究科長・専攻代表からのコメント

<文学研究科長・専攻代表からのコメント>

■文学研究科長 大和田 攝子

大学院における授業アンケートは、回答者の匿名性を担保するため、その回答がどの専攻・学年の院生のものかを明らかにせず、文学研究科全体の結果として集計を行っている。そのため、各授業担当教員も専攻代表も、授業アンケートの結果が当該専攻のものかどうか明らかではないという前提で、各自の授業を振り返る機会としている。こうした点を踏まえて、各専攻代表からのコメントをもとに研究科全体として総括したい。

まず、授業アンケートの結果については、全体的に概ね高い評価が得られていたという認識を両専攻の教員がもっていることが伺える。各教員の自己点検・評価の内容について、心理学専攻からは、多くの教員が受講生の興味・関心を汲み取り、知識の習得度や理解度を勘案しながら、受講生の主体的な学びを促進するためにディスカッションを重視するとともに、自由に発言しやすい授業空間づくりに努めていることがうかがわれたとのことであった。

その一方で、授業アンケート項目の中の「授業時の発表のための準備期間は十分与えられた」に対する回答は、「どちらともいえない」が半数近くを占めている点を、いずれの専攻も留意すべき結果であると受け止めている。特に、臨床心理士や公認心理師などの専門職を目指す心理学専攻の大学院生は、実習を含め受講しなければならない科目が多いことから、過重な負担とならないように配慮が必要であろう。

さらに授業改善に関して、国語国文学専攻からは、大学院生の学術的背景や経歴が多様化する中、一人一人の学習意欲や予備知識を考慮しながら柔軟に授業を展開する必要性が指摘された。また、心理学専攻からは、それぞれの授業の到達目標と関連して、所定の授業回数の中で受講生全員に十分な学びの機会を提供するために、より一層の工夫が必要とのことであった。大学院生にとってよりよい学修過程を提供できるよう、各専攻には引き続き改善に向けた取り組みを期待したい。

■国語国文学専攻代表 黒木 邦彦

殆どの項目において「2. ややそう思う」以上の高評価を 13 分の 9 以上得ている。

5 (1) 「教員は授業のための準備を十分していた」

10 (1) 「授業内容をさらに深く学ぶためのアドバイスがあった」

という項目において「4. あまりそう思わない」以下の低評価を 2-3 票得てしまった点と、

7 (1) 「授業時の発表のための準備期間は十分与えられた」

の評価が芳しくない（「2. ややそう思う」以上の高評価の方が少数派である）点とを除けば、全般的に好評を得ている。現状の問題点は少ないと見て良からう。

各担当の自己点検評価を概観しても、悪いものはさして見当たらない。授業運営は概ね良好

である。

授業改善に関するコメントとしては、教育の質的向上に言及したものが目立った。院生の学習意欲や予備知識に考慮すべきとのコメントも少なくない。院生の学術的背景・経歴が多様化しているので、様々な指導法のもと、多彩な学習法を提示する必要がある。何を教えるべきか（或いは、教えずとも良いか）を授業ごと、学生ごとに判断して、授業運営を最適化したい。学生の子備知識が皆無に近いことを前提として、(人文)科学(的思考法)の基礎を一括して教える授業も必要に思われる。この点については来年度から早速対応する。

■心理学専攻代表 小松 貴弘

授業アンケートの結果からは、授業に関する満足度は概ね高いことがうかがわれる。ほとんどの質問項目に対して、肯定的に評価する回答が過半数を占めているが、質問7「授業時の発表のための準備期間は十分に与えられた」に対する回答のみは、「どちらともいえない」が半数近くを占めている。心理学専攻の院生は実習を含む授業で多忙になりがちであり、時間にゆとりを持つことができずにいる者が多いことに留意すべきであると思われる。

各授業担当教員の振り返りからは、それぞれに、受講者の興味関心と授業内容に関連する知識の習得度と理解度をアセスメントしながら、受動的な受講態度や学びに陥らないようにディスカッションを重んじて、受講者の発言を促すとともに、自由な発言がしやすい授業空間づくりに努められていることを、うかがい知ることができる。

一方で、いくつかの科目においては、それぞれの授業の到達目標と関連して、所定の授業回数の中で受講生全員に十分な学びの機会を提供するために、授業運営上のより一層の工夫を要するという課題があると感じられていることがうかがわれる。この他、受講生のより深い学びにつなげるための課題の指示や関連文献等の情報提供について、より一層の配慮を心がけたいという振り返りも見られた。

こうした授業アンケートとその結果を踏まえた授業改善を積み重ねることで、専攻として、院生にとってのより良い学修過程の提供を目指したい。